

要約公表

論文題目 W・ベンヤミンの思考の展開——内的憧憬と外部空間——

申請者 小林哲也

本論文は、ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940年）の内的憧憬に焦点をあて、彼の思考の特質を明らかにするものである。ベンヤミンに指摘される非主体中心主義的思考、他者の救済といったモチーフは、むしろ彼の主観的憧憬との関係において見なければならぬものであることを、彼の青年期から批評家としての活動期にいたるまでの思考展開に即して論じている。

ベンヤミンの思考は、哲学的、認識論的な側面と、倫理的、実践的な側面を常に同時に含んでおり、一側面のみに焦点を当てるのでは理解できない複雑さをもっている。精神と言語との関係の問い直しは、主観が手段化する領域の外部の他者への注意を要請し、沈黙の聴き取りという課題は、瞬間的な視覚的体験モデルの批判に向かい、主観中心主義の思考の転換は意志と決断の意義を問い直し、希望の理念の構築へと向かう。この凝縮された思考の絡まり合いを解くためには、彼の思考の内的運動を、それがおかれた環境とともに、明らかにする必要がある。例えば、彼に見られる「楽園の言語」や「神」といった「神学的」な思考の意味は、ユダヤ文化や宗教学に還元することによってではなく、むしろ歴史的コンテクストの中でのテキストの成立を捉え、そして、そこでベンヤミンが抱えていた内的な課題を明らかにすることで適切に理解される。

ベンヤミンの思考は、従来しばしば、オプティミズムかペシミズムかといった対立で解釈されてきた。しかし、歴史的コンテクストの中でそれぞれのテキストの意義を見極めると、それが主観の外部で沈黙する存在との応答関係を倫理的課題として受け止める姿勢に根ざしたものであることがわかる。こうした他者性の思考は、例えばそのゲーテ論で語られる「希望は希望なきもののために、我々に与えられている」といった一節にも見られる。ここでベンヤミンが考えているのは、テオドール・W・アドルノ（1903-1969年）が理解したような「可能性を欠くものが可能となる」というペシミスティックな逆説につきるものではなく、他者に潜在する希望を救い出すという実践的課題であった。この姿勢から、世界全体を透過的に見通せると自負する「知」の傲慢への批判も生じる。ベンヤミンは、主観的な意志の外部に広がる自然や死者、語る言葉を持たずに沈黙する人々の存在に注意を払い、彼らの沈黙をいわば「翻訳」して響き合わせることができるような伝達の空間を志向していた。本論文で明らかにしているのは、ベンヤミンが批評家としての言語実践においてもこうした伝達空間の可能性を探っていた事である。青年期からの彼の憧憬は「沈黙」の局面をくぐり抜けながら保持され深化していた。

批評家としてのベンヤミンは、シュルレアリスムが開く「身体空間」と映画メディアがもたらしうる「神経伝達」のに着目していく一方で、ヴィーンの批評家カール・クラウス（1874-1936年）の言語実践がもつ伝達の力に大きな注目を払っていた。青年ベンヤミンの憧憬が導き出した言語による他者との伝達空間は、ここにおいて、もはや理念的な目標であるにとどまらず、アクチュアルな実践の場として開かれるものとなっていた。彼のクラウスへの接近はベンヤミンのマルクス主義への傾斜と切り離せないものであるにもかかわらず、その内実がこれまで十分に明らかにはなっていなかった。本論文では、ベンヤミンの政治化の意義を当時の彼の左翼知識人批判から検討し、それがユートピア的思考の批判に

由来することを明らかにしている。ペシミスティックなメランコリカーとしての側面が強調されることも多いベンヤミンだが、彼はここにおいて主観的なメランコリーを内破して、その外部へと言語を解き放っていく契機を示している。

論文は全3編、8章構成をとっている。

第1編では、青年運動期におけるベンヤミンの憧憬の在り方を詳細に論じ、マルティン・ブーバー（1878-1965年）との思想的対峙を経てベンヤミンが思考の外部を意識するに至るまでの過程を明らかにしている。第1章では、これまでの研究ではあくまで初期の若書きとして周辺に追いやられていた諸著作を扱い、同時代の諸々の青年運動との比較の中で、青年ベンヤミンに見られる「何か別のもの」への憧憬の特質を明らかにしている。第2章では、「体験」概念への批判、言語を単なる比喩、象徴を祭り上げるための手段とすることの批判など、後にベンヤミンの思考の核となるモチーフが、大戦前後のブーバーの言説への批判をきっかけにうまれていたことを論じている。第3章では、ベンヤミンの『言語一般および人間の言語について』（1916年）における「言語の直接性」というモチーフが、ブーバーらに見られる「体験の直接性」重視を覆すものとなっていることを明らかにしている。

ここで論じられる思考の「外部」とは、哲学的、倫理的な側面とすれば、体験する主観、あるいは主観の意識の外部である。ベンヤミンの言語論においては、言語は、話し手が意図を伝達することにつくものではない。むしろ伝達の事象そのものに焦点が当てられ、表現が伝達空間に広がりながら主観にも浸透している、というふうに見方が転換される。主観の外部空間の導入は、哲学図式の大きな転換を伴うものであると同時に、沈黙する他者や自然への倫理的課題に答えるためのものだった。ここから、ベンヤミンに芽生えたのは、現前するものの直観のみを認識対象とする哲学モデルへの批判的意識である。不透明なものとの関わりの中で、注意深く主観の外部の沈黙を聴き取ろうという姿勢は、ベンヤミン独特のものだが、認識論的にも、倫理的にも大きな射程をもったものである。主観の外部で沈黙する自然、他者への注意深さがベンヤミンの中でいかに展開していたのかを本論文では明らかにしている。ベンヤミンは、単に主観主義の限界を指摘するのみでなく、その限界において見える課題に実際に応えようとしていた。言語の直接性というテーゼによって、主観中心主義から実際に離れた思考モデルを考察し、実際、従来の哲学モデルを越えてた思考を展開し得ていたのである。これは「主客未分の根源的状态」といった形で、否定的に主観主義を乗り越えるものではない。主観の内部の心的な動きの展開を十分に追う中で、それが外部に触れる地点を見据えるところに、ベンヤミンの思考の特質がある。

第2編では、ベンヤミンが、未だ見通し得ない不透明なもの、声をあげずに沈黙にとどまっているものへと思考を向けていくことの意味を論じている。主観的な動機によって世界を語ろうとする言語を批判するベンヤミンは、主観的な見通しによって世界を見通せるという思い上がりを批判していた。そうした思考は、不透明性に耐えられない不安によって生み出されている。ベンヤミンは、全体を透過的に見通すヘーゲル的な思考、あるいはそれに親近的なゲオルク・ルカーチ（1885-1971年）の思考とは違った、不透明な現実をそれとして受け止める姿勢を導きだしていく。現実の不透明性、他者の不透明性、自己の本性の曖昧さといった見通しがたいものの領域においてベンヤミンは思考する。ベンヤミンにおいては、閉塞状況の外部を目指す憧憬が、全てを見通す知の高みを目指すというよりも、そこに至れない中で陥る困難を内破することへと向かう。第4章では、ベンヤミンのギリシア悲劇論において、不透

明な現実の中で青年期以来の憧憬が、沈黙と反抗というモメントを含んだものとなっていることを論じ、第5章では、ベンヤミンが不透過なものと直面することを思考の条件として理解していたことを、彼の『ゲーテの「親和力」』（1922年）の分析から明らかにしている。

ベンヤミンは、ギリシアをルカーチらのように同質で透明な世界としてではなく、不透明な運命が浸透した残酷な世界とみた。その中で立ち上がる「英雄」は、明白な使命を負うのではなく、何もわからないまま、しかし受け入れるべきではない不正には反抗の姿勢を示す。世界を裁断する透過的な高みに立とうとする思考とは違った姿勢がここにある。いわゆる「決断主義」的な思想とも目されるこの時期のベンヤミンの思考は、「不決断」と「決断」の間で揺れている。ここにあるのはオプティミズムかペシミズムかという世界観の対立ではなく、人間の内部で生じる葛藤の引き起こす緊張である。ベンヤミンは、ゲーテの小説『親和力』の人物たちが体現する葛藤を、幸福追求をするがゆえに至福の生を得られないパラドクスを体現するものとして描き出している。本論文では、断片群『精神物理的問題の図式』と『神学的-政治的断章』を合わせて考察することで、『親和力論』において、ベンヤミンが「傾向性」が向かう「幸福」と、「決断」が目指すだろう「至福」の逆説を問題にしていたことを明らかにしている。この逆説を提示する中で、ベンヤミンは、自然を超脱して意志が絶対化されることへその不可能性を突きつける。至福の愛は、ある種の理念として働きながら、人間にとっては超越的なものであるにとどまる。だが、ベンヤミンは、至福の理念自体を葬り去ることはなく、他者の至福への祈りは肯定されて良いと議論を展開していく。希望は希望なきもののためにのみわれわれに与えられていると、ベンヤミンが希望について語る時、それは主観的な至福への決断に宿るものではない。希望は、所有物、主観の獲得物ではなく、いわば主体と主体の間において、他者の至福への祈りとして浮かんでくるものと考えられている。この希望の聴き取りという課題がベンヤミンの思考の核心にあることを、本論文では明らかにしている。

第3編では、救済と没落、決断と不決断といった対立が生み出す葛藤状態をベンヤミンがいかに考え、それをいかに内側から克服していくのかについて、彼のエッセイ『カール・クラウス』（1931年）読解から明らかにする。第6章では、「知識人の政治化」を課題としていた当時のベンヤミンが、共産党系の左翼文学者とも「ブルジョワ的」な域をでない左翼急進派とも違う独自の位置を占めていたことを明らかにし、「中立の観察者」ととどまらない実践を、むしろ保守的とすらいえるクラウスのうちに見いだしたことの意味を論じている。第7章では、ベンヤミンのクラウス論を表現主義との対決という隠れたテーマを軸に再構成し、「純粋さ」と「罪」との葛藤から抜け出るモメントをベンヤミンがいかに探っていたのかを追っている。第8章では、「純粋さ」の幻想に囚われない「純化」の実践の内実をベンヤミンがどのように捉えていたのかを明らかにしていく。

ベンヤミンは、教養市民層的な純粋な精神を中心とした思考の枠を突き破る必要を感じていた。これはベンヤミン自身のかつての課題でもあり、知識人全体の課題とも考えられる。『カール・クラウス』において、ブルジョワ的教養市民の理想主義の限界を内的に克服することと、親和力論で闘われた葛藤の克服とが、重ね合わされている。純粋な精神性、純粋な人間性、純粋な自然という理想状態と、それを引きずりおろす現実の罪という構図は、第2編で扱った葛藤の構図を反復するものである。ベンヤミンは「純粋さ」という状態への固執とデーモン的な自然への囚われが葛藤を織りなしていることを明らかにし、この対立地平を抜け

出る契機を探る。「純粹さ」を保持しようとするのであれば、それに固執するのではなく、「純化」の運動が展開されなければならないということをベンヤミンは言った。そしてクラウスが、呪物と成り果てた純粹さを破壊し、根源的にそれがもっていたポテンシャルを呼び戻す形で、その力を現実批判へと展開していく姿に自分の歩みを重ねていた。救済への希望と、その不可能という思弁的な対立の次元にいる限り、その葛藤は内側から解かれることはないこと、葛藤の外部へ出ようとする具体的な振る舞いが必要だということを、ベンヤミンはここで示している。そして、この葛藤の外部において、「身振り」が連帯しうるような伝達空間の可能性が開かれることをベンヤミンは期待していた。言葉や身振りは、所有物として愛でられるためではなく、その力を発揮させるものとしてこの空間にあるとベンヤミンが考えていた事を、「熱狂」や「憧憬」の「根源」における反復、あるいは「引用」のモチーフを手がかりに明らかにしている。そして、この伝達空間に関する思考が、ベンヤミンの獲得した一つの到達点として意義深く、またきわめてアクチュアルなものでもあることを論じている。ベンヤミンは、閉塞状況に萎縮せずに思考のラディカリズムを貫いた。ここには、希望のなさに悲観する閉塞状態に囚われずに、洪笑とともに、「熱狂」の伝達を行うような力が実際に、秘められていた。「憧憬」、あるいは「熱狂」とともに考察するならば、彼の言語論も、クラウス論も、ユートピア的な状態を思い描くだけのものにとどまらず、つねに現実的な課題を提示するものとしてあったことが明らかなのである。